

学位授与番号：甲 9 9 3 号

氏 名：川崎 彩子

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 27 年 6 月 24 日

学位論文名：

認知症終末期医療における胃ろうと人工呼吸器の認知度と意向についての質問紙調査非医療従事者と医療従事者との比較調査

主論文名：

Recognition of and intent to use gastrostomy or ventilator treatments in older patients with advanced dementia: Differences between laypeople and healthcare professionals in Japan.

（認知症終末期医療における胃ろうと人工呼吸器の認知度と意向についての質問紙調査非医療従事者と医療従事者との比較調査）

学位審査委員長：教授 岩楯公晴

学位審査委員：教授 柳澤裕之 教授 井口保之

論 文 要 旨

論文提出者名	川崎彩子	指導教授名	松島雅人
主論文題名			
Recognition of and intent to use gastrostomy or ventilator treatments in older patients with advanced dementia: Differences between laypeople and healthcare professionals in Japan (認知症終末期医療における胃ろうと人工呼吸器の認知度と意向についての質問紙調査 非医療従事者と医療従事者との比較調査)			
著者名			
Ayako Kawasaki, Masato Matsushima, Yasuhiko Miura, Takamasa Watanabe, Tomokazu Tominaga, Takuya Nagata, Yoko Hirayama, Akinari Moriya, Kouji Nomura			
誌名 Geriatrics Gerontology International 2015; 15: 318-325			
論文要旨			
<p>背景・目的: 日本国内では認知症高齢者に対する胃ろう使用が標準的ケアとされ、すでに決断能力のない本人に代わって家族が決断し、広く実施されている。しかし終末期医療についてどのように理解し、自分や家族に対してどのような医療実施の意向を持っているかということについての国内研究は限られている。認知症終末期医療における胃ろうと人工呼吸器の認知度および実施の意向について非医療従事者と医療従事者間での比較検討を行った。</p> <p>方法: 2011年11月から2012年1月にかけて質問紙調査を行った。非医療従事者は野村病院人間ドック受診者を、医療従事者は三鷹市に勤務する医師および看護師を対象とした。まず非医療従事者の胃ろうと人工呼吸器の認知度を調査した。さらに認知症高齢者のシナリオを提示したうえで、胃ろうおよび人工呼吸器使用が避けられない死の経過を単に先に延ばす延命治療かどうか質問した。また判断対象が自分・家族・患者であった場合に各医療行為を実施するかどうかの意向、および同シナリオで「無駄な延命治療は希望しない」という事前指示があった場合の意向について各々比較した。</p> <p>結果: 有効回答者は非医療従事者が266名、医療従事者が259名であった。非医療従事者のおよそ60%は胃ろうについて知識がなかった。人工呼吸器は医療従事者のほうが延命治療としての認識が強く、実施もより望まない傾向が見られた。一方で胃ろうについての回答は両群で差がなかった。さらに医療に従事しているかどうかに関わらず、自分には希望しない医療行為を、家族または患者には希望する傾向がみられた。事前指示があるとこれらの医療行為実施の意向は減った。</p> <p>結論: 終末期医療についてのより良い理解が医療従事者と非医療従事者双方に必要である。</p>			

論文審査の結果の要旨

川崎彩子氏の学位申請論文は主論文 1 編、1 冊からなり、タイトルは、Recognition of and intent to use gastrostomy or ventilator treatments in older patients with advanced dementia: Differences between laypeople and healthcare professionals in Japan (認知症終末期医療における胃ろうと人工呼吸器の認知度と意向についての質問紙調査：非医療従事者と医療従事者との比較調査) である。松島雅人教授のご指導による。

本論文は、認知症終末期医療における胃ろうと人工呼吸器の認知度および実施の意向について、非医療従事者と医療従事者に対して行った質問紙法によるアンケート調査と統計解析が中心となっている。これまで、一般を対象とした終末期医療に関する意識調査は数々行われてきたが、医療従事者も対象に含めて調査を行い、医療従事者・非医療従事者間で本格的な統計解析による比較検討を行った初めての研究である。今回の結果から、非医療従事者のみならず医療従事者の中でも終末期医療に関する認識に多様性があることが示唆され、医療従事者と非医療従事者双方に、より早期からの教育、情報提供をしていくことで、社会全体で終末期医療に対する考え方が成熟していくことが望まれると結論している。

公開学位審査は平成 27 年 6 月 2 日、柳澤裕之教授、井口保之教授ご出席、松島雅人教授ご臨席のもと開催された。

席上、

- サンプルの偏りを自覚していながら、なぜそのようなサンプルを選択したのか。
- サンプルの偏りの結果への影響はないのか。
- 非医療従事者と比較して医療従事者の回答率が低いのはなぜか。
- 質問紙の質問内容があいまいではないか。
- ロジスティック回帰分析の生データを提示すべきではないか。
- 実際の現場ではどのように対応しているのか。

等、多くの質問やテーシスに対する修正意見があった。それに対し川崎氏は、いずれにも的確に回答した。その後、審査委員会において慎重に審議した結果、本論文は学位申請論文として十分価値があるものと認めた次第である。なお、テーシスの一部修正については、後日確認をした。